

森三郎はいかにしてローズ・ファイルマンを知ったか

How did Saburo Mori Encounter Rose Fyleman

鈴木 哲*

Tetsu SUZUKI

Saburo Mori (1911–93) is described as born in Kariya-machi, Hekikai-gun [today's Kariya], Aichi, in 1911, and at the age of 20, his story “Akana Soemon Kyodai” [Akana Soemon Brothers] was accepted in juvenile monthly magazine *Akai Tori* by Miekichi Suzuki (1882–1936), before being employed at the *Akai Tori* company in Tokyo, as an editor-writer, in 1932 (Sakai, 1995). Kamiya (2014) revealed that his early stories of “Akai Post” [Red Post] and “Komori-gasa” [Umbrella] in 1931 and “Tsumuji-kaze” [Whirlwind] in 1936 were the retold of the work of English children's author Rose Fyleman (1877–1957) after 83 years. “Akai Post” was attributed to the two of “The Pillar- Box” and “The Fairy Who Fell into a Letter-Box” in *Forty Good-Night Tales* (1923), “Komori-gasa” to “The Magic Umbrella” in *The Rainbow Cat and Other Stories* (1922), and “Tsumuji-kaze” to “Mrs. Moodie (i) the whirlwind” in the former.

This paper is to discover how Saburo Mori encountered the fairy stories of Rose Fyleman. After pure speculation that Sabro's elderly brother Senzo Mori (1895–1985) might have acted as a mediator as in “Akana Soemon Kyodai” retold from Lafcadio Hearn's “Of a Promise Kept” (Sakai, 1995) in *A Japanese Miscellany* (1901), the author finds a small footnote of “a drama by Fyleman” in the *katakana* syllabary at the end of “Gin-no uwagi” [Silver coat] by Miekichi Suzuki in 1926 March issue. It is then discovered that “Gin-no uwagi” and “Oningyo” [A doll], in June 1926, are the translations of “The Fairy Riddle” and “The Fairy and the Doll” in Fyleman's *Eight Little Plays for Children* (1924). The linkage of Saburo Mori and Rose Fyleman through Miekichi Suzuki is discussed, and how Fyleman's works have been accepted in Japan for a century is revealed.

Keywords: Saburo Mori, *Akai Tori*, Rose Fyleman, Senzo Mori, Lafcadio Hearn, *The Magic Umbrella*, Miekichi Suzuki

* 桜花学園大学学芸学部英語学科非常勤講師

Part-time lecturer, School of Liberal Arts, Department of English, Ohkagakuen University, Toyoake, Aichi, Japan. The address is tetsu_s@katch.ne.jp

ローズ・ファイルマンの発見

森三郎（1911-93）は刈谷市（当時愛知県碧海郡刈谷町）が生んだ童話作家である。20歳で鈴木三重吉（1882-1936）主宰の童話雑誌『赤い鳥』に茅原順三の筆名で投じた「赤穴宗右衛門兄弟」が1931年3月号に掲載され、翌年「赤い鳥社」に入社、編集記者兼作家となった（酒井，1995）。没後、代表作が刈谷市教育委員会によって『森三郎童話選集 かささぎ物語』（1995）と『同 夜長物語』（1996）にまとめられた。2005年から3年に1度、刈谷市中央図書館が森三郎童話賞全国募集を実施し、2013年に同教育委員会がDVD「刈谷偉人伝 その4 森銑三と森三郎兄弟〜ふるさと刈谷で育まれた固い絆〜」を制作した。2010年に「森三郎生誕百年の会」（筆者は会員）、2012年にこれを母体とする「森三郎刈谷市民の会」（同）が発足し、毎月「森三郎の作品を読む会」を中央図書館で開催し、月報「かささぎ通信」と会誌『かささぎ』を発行している。

森三郎刈谷市民の会の神谷磨利子（2014）は「森三郎とローズ・ファイルマン」において、『赤い鳥』の森三郎童話「赤いポスト」（筆名須川よし子、1931年9月号）、「かうもり傘」（同11月号）、「つむじ風」（筆名笹塚一二、1936年10月鈴木三重吉追悼号）の原作者が英国のローズ・ファイルマン Rose Fyleman（1877-1957）であり、原典が *Forty Good-Night Tales*, 1923 の“The Pillar-Box”と“The Fairy Who Fell Into a Letter-Box”の合作、*The Rainbow Cat and Other Stories*, 1922 の“The Magic Umbrella”、*Forty Good-Night Tales* の“Mrs. Moodle (i) the whirlwind”であることを明らかにした。前年に神谷が『赤い鳥』「赤いポスト」末尾に（ファイルマンによる）、「つむじ風」文頭に（ローズ・ファイルマン）の注記を見つけ（「かうもり傘」は出典なし）、同会の山田千恵子が福音館書店『まほうのかさ』（初版1999）の表紙に「R. ファイルマン原作」、奥付に「Text © Rose Fyleman」とあることを指摘し、83年ぶりに、ファイルマン—ローズ・ファイルマン— Rose Fyleman の糸が繋がった。『夜長物語』は「赤いポスト」と「かうもり傘」（pp. 7-14, 62-69）を収録するが、出典は記載していない。ファイルマンの発見は、『赤い鳥』を読み込んでいったからこそである。

ローズ・ファイルマンは一般的な人名辞典・百科事典に項目がないが、Compton's by Britannica, <http://kids.britannica.com/comptons/article-9324112/Rose-Fyleman> があり、また Carpenter, Humphrey and Prichard, Mari (1999). *Oxford Companion to Children's Literature* が立項する。和訳である『オックスフォード世界児童文学百科』原書房（1999）とともに引用する。

FYLEMAN, ROSE (AMY) (1877-1957), children's poet, author, and playwright, produced many books, but is now remembered only for the poem 'Fairies' which appeared on the first page of her *Fairies and Chimneys* (1918), and began: There are fairies at the bottom of our garden!... (p. 193)

「多くの本を出版した子どものための詩人・作家・脚本家。しかし、現在人びとが記憶しているのは、『妖精たちと煙突』(Fairies and Chimneys, 1918)の巻頭を飾った『妖精たち』という詩1編だけである。この詩はつぎのようにはじまる。うちの庭の奥に妖精がいる!…」(西村, 1999)。

Forty Good-Night Tales と *The Rainbow Cat and Other Stories* の原文はそれぞれ、

<http://fadedpage.com/showbook.php?pid=20090208>

http://fadedpage.com/showbook.php?pid=20081209#THE_MAGIC_UMBRELLA

で閲覧できる。2017年7月21日と8月4日、刈谷市中央図書館で、英国人を含め10数人の「森三郎の作品を読む会」番外編「Rose Fyleman の作品を読む会」が開催された。多くの参加者の疑問は、小学校高等科を卒業し上京した若き森三郎が、いかにしてローズ・ファイルマンを知り、「赤いポスト」「こうもり傘」「つむじ風」を『赤い鳥』に翻訳再話し得たかであった。

小泉八雲—萩原恭平・森銑三—森三郎

当初、森三郎がローズ・ファイルマンを知ったのは、ラフカディオ・ハーン(小泉八雲; 1850–1904)の典拠作品同様、書誌学者の兄森銑三(1895–1985)を介してであろうと想像した。

酒井(1995)は「赤穴宗右衛門兄弟」は「小泉八雲『約束』の再話」であり「八雲が原典にしたのは上田秋成『菊花の契』(『雨月物語』)で」「銑三が『刈谷新三郎』の名で友人(萩原恭平)とともに訳した『小泉八雲選集』を子ども向きに書き直したもの」(p. 239)であることを、20年以上前に明らかにした。神谷(2017.3)はこれを進め、萩原恭平・刈谷新三郎訳注『小泉八雲選集』第一篇、嶺光社(1926)の訳文「約束を守る」(pp. 55–60)と原文“Of a Promise Kept”(pp. 56–62)から、萩原・刈谷が典拠としたハーン(「ヘルン」とも)の *A Japanese Miscellany*, Little, Brown, and company (1901)、ハーンが拠った上田秋成「菊花の約」『雨月物語』(1776)を検討し、森三郎—萩原・刈谷—ラフカディオ・ハーン—上田秋成を比較し、萩原・刈谷以前は「あかあな」でなく「あかな/Akana」であることを明らかにした。名古屋市中央図書館所蔵の萩原恭平・刈谷新三郎訳注『小泉八雲選集』第二篇(1927)の表紙裏には寄贈票「昭和二年二月十四日 森銑三君」の貼付があり、刈谷が森銑三の筆名であることを示している。

さらに、神谷(2017.12)は、筆名茅原順三「おばあさんと鬼」(1931年7月号)の出典はハーンの *The Old Woman Who Lost Her Dumpling*: 「団子をなくしたお婆さん」(長谷川武次郎、1902)、「鐘」(1931年10月号)は『帝国民』1920年4月号の刈谷新三郎[森銑三]「鐘のた

ましひ」で、その原典は Hearn, Lafcadio, “The soul of the great bell,” *Some Chinese Ghosts* (1887) Roberts brothers、そして「かさゝぎ物語」(1931年12月号)のそれは Lafcadio Hearn. *Some Chinese Ghosts* の ‘The Legend of Tchi-Niu’ 「織女の伝説」(平井呈一訳『小泉八雲作品集』第1巻、恒文社、1965)とし、「亡くなった人を悼み、お墓を立てるということが重要な意味」と述べた。

萩原・刈谷訳注『小泉八雲選集』第一篇(1926)・第二篇(1927)に「織女の伝説」はないが、同時期の第一書房『小泉八雲全集』第一巻(1926)に落合貞三郎訳「織姫の傳説」(pp. 256-268)がある。『選集』第二篇に「第三篇の原稿もすでに大体纏まつてゐる」(萩原・刈谷、1927, 緒言)とある。未刊に終わった第三篇に「織女の伝説」原稿があれば、三郎は参照したであろう。

萩原(1898-1969)は稲村松雄、竹沢啓一郎とともに英語教科書『Jack and Betty』(1946)編纂者として知られる。研究社・英語青年社『英語青年』記者、早稲田大学教育学部英語英文学科教授を歴任、『ワグネル物語』(研究社、1929)や『マンスフィールド短編集』(春陽堂、1933)などがある(萩原敬一、1969)。銚三は『英語文学世界』1969年9月号に「萩原恭平君逝く」、『英語青年』同年10月号に「学生時代の萩原恭平君」を書いている(森銚三、1974)。

『小泉八雲選集』第一篇に「十二篇中のほとんどすべては、すでに大正八九年[1919-20]の頃わたしら二人の関係してゐた雑誌に一度掲載した」(萩原・刈谷、1926, 序文)とある。『帝国民』1920年4月号の刈谷新三郎「鐘のたましひ」(1920)は、序文の記述を裏付ける。

「赤穴宗右衛門兄弟」以下4作はハーンの萩原・銚三訳の再話と考えられる。小泉八雲出典の森三郎童話を[表1]にまとめる。銚三と萩原にファイルマンと作品は見いだせない。

表1 小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)出典の森三郎童話

TABLE 1 Saburo Mori's Stories Attributed to Lafcadio Hearn

作品	名義	『赤い鳥』	再掲	Lafcadio Hearn 出典
赤穴宗右衛門兄弟	茅原順三 (森三郎)	1931年 3月号 pp. 58-63 (出典なし)	『夜長物語』 (1996) pp. 198-204	小泉八雲著、萩原恭平・刈谷新三郎[森銚三]訳注「約束を守る」“Of a Promise Kept”『小泉八雲選集』第一篇、嶺光社、1926— <i>A Japanese Miscellany</i> , Little, Brown, and company, 1901—上田秋成「菊花の約」『雨月物語』(1776).
おばあさんと鬼	茅原順三 (森三郎)	1931年 7月号 pp. 60-67 (同)	『かささぎ物語』 (1995) pp. 165-171	Hearn, Lafcadio, <i>The Old Woman Who Lost Her Dumpling</i> : 『団子をなくしたお婆さん』、東京：長谷川武次郎、1902.

鐘	森 三郎	1931年 10月号 pp. 20-27 (同)	『夜長物語』 pp. 85-92	刈谷新三郎「森銑三」『鐘のたましひ』 『帝国民』(1920年4月号) —Hearn, Lafcadio, “The soul of the great bell” <i>Some Chinese Ghosts</i> , Boston: Roberts brothers, 1887.
かさゝぎ物語	森 三郎	1931年 12月号 pp. 60-70 (同)	『かさざぎ物語』 pp. 103-111	萩原恭平・刈谷新三郎訳注『小泉八雲 選集』第三篇未刊原稿または『小泉八 雲全集』第一巻(第一書房、1926) 落 合貞三郎訳「織姫の傳説」 — Hearn, Lafcadio, “The Legend of Tchi-Niu” <i>Some Chinese Ghosts</i> , 1887.

ローズ・ファイルマンと鈴木三重吉

『赤い鳥』創刊号(1918)からページを繰ったところ1926年3月号の鈴木三重吉「銀の上着」(児童劇)末尾に「(ファイルマンの劇による)」、同6月号鈴木三重吉「おにんぎやう」(児童劇)末尾に「(ファイルマンによる)」を見出した(後者は佐藤由美による教授)。1926年は『赤い鳥』創刊8年目の1929年休刊以前の前期で、「赤いポスト」「かうもり傘」の5年前である。

三重吉には『世界童話集』(1917-18)をはじめ西洋おとぎ話の翻案が多く、「湖水の女」(1916)の *The Physicians of Myduai* (1861) “The Lady of Lyn Y Fan Fach” (半田, 1998, p. 152)、「星の女」(1917)の Donald A. Mackenzie. *Indian fairy Stories* “Story of the Star Maidens” (桑原, 1960, p. 43)、「大い」(1918)の Katharine B. Judson. *Myths and Legends of British North America* (1917) “Wolverene and the Geese” (鈴木, 1918) が明らかにされたが、「原典についてその検証はまだほとんどなされていない」(勝尾金弥, 1996, p. 259)。桑原(1960)は「銀の上着」「おにんぎやう」(改題「夜」)の原著を単に「イギリス・或一作家」(pp. 127, 129)とし、ファイルマンを明記していない。広島市立図書館「デジタルアーカイブ：鈴木三重吉と『赤い鳥』の世界」には、笹塚一二「つむじ風」の「備考」に「ローズ・ファイルマン」が1件あるのみである。これまでにファイルマンと三重吉の関係が論じられたことはないと思われる。

「児童劇」とあることから *Eight Little Plays for Children* (1924) と推測した。Web上にテキストがなく、国立国会図書館にも蔵書がないため、米国の古書店から英国 Methuen 社版翌年の米国 Doubleday & Company 版(1925)を取り寄せ、「銀の上着」「おにんぎやう」の原典が “The Fairy Riddle” および “The Fairy and the Doll” であることを確かめた。

ローズ・ファイルマン出典の鈴木三重吉と森三郎『赤い鳥』童話を〔表2〕にまとめる。筆名読み替えは、日本近代文学館『「赤い鳥」復刻版 解説・執筆索引』(1979)による。

表2 ローズ・ファイルマン出典の『赤い鳥』童話（灰色地は鈴木三重吉名義作品）

TABLE 2 Stories in *Akai Tori* Attributed to Rose Fyleman

作品	名義	掲載『赤い鳥』	出典記事	Rose Fyleman 出典
銀の上着 (児童劇)	鈴木三重吉	1926年3月号 pp. 12-23	末尾「(ファ イルマンの 劇による)」	“The Fairy Riddle” in <i>Eight Little Plays for Children</i> . London: Methuen & Co. 1924; New York: Doubleday & Company 1925
おにんぎやう (児童劇)	鈴木三重吉	1926年6月号 pp. 8-13	末尾「(ファ イルマンに よる)」	“The Fairy and the Doll” in <i>Eight Little Plays for Children</i> . ditto
赤いポスト (童話)	須川よし子 (森三郎)	1931年9月号 pp. 20-27 [『夜長物語』 (1996)]	末尾「(フ ァイルマン による)」	“The Pillar-Box” and “The Fairy Who Fell Into a Letter-Box” in <i>Forty Good-Night Tales</i> . London: Methuen & Co. 1923
かうもり傘 (童話)	森 三郎	1931年11月号 pp. 38-43 [『夜長物語』 (1996)]	(なし)	“The Magic Umbrella” in <i>The Rainbow Cat and Other Stories</i> . London: Methuen & Co. 1922
つむじ風 (童話)	笹塚一二 (森三郎)	1936年10月 鈴木三重吉追 悼号 p. 83	文頭「(ロー ズ・ファイ ルマン)」	“Mrs. Moodle (i) the whirlwind” in <i>Forty Good-Night Tales</i> . London: Methuen & Co. 1923

ローズ・ファイルマン—鈴木三重吉—森三郎

ファイルマン作品をわが国で初めて紹介したのは三重吉で、「銀の上着」「おにんぎやう」が嚆矢と考えられる。*Eight Little Plays* のロンドン発行の2年後である。三重吉 (1938, pp. 443-444) は1923年3月6日米蟲貞義あて書簡で「夏目先生 [漱石 (1867-1916)] 所蔵の童話の本が私方へすつかり来てゐるといふことはかつて新聞でも見ましたが全然虚伝で」「宅の蔵書はみんな私が集めました」としている。*Eight Little Plays* も三重吉蔵書と考えられる。

表3 『赤い鳥』掲載ローズ・ファイルマン作品冒頭文英日比較（灰色地は鈴木三重吉名義作品）

TABLE 3 Rose Fyleman's Opening Sentences and their translations in *Akai Tori*

作品	出典／『赤い鳥』	冒頭文
“The Fairy Riddle”	<i>Eight Little Plays for Children</i> . 1924	[Enter the FAIRY QUEEN and her attendant gnome, GREEN CRIG. She comes in right and sits down on a knoll left, puts her chin on her hand and heaves a deep sigh...]
	鈴木三重吉 「銀の上着」 1926年3月号	[妖女の説明] 幕が上がる。妖女の王妃、グリツグをおともにつれて、しづんだ顔をして右手から出て来る。そして左手の、小さな、ひくい、圓い丘の上の、草の上にすわり、片手で、おとがひをさへて、ふかい、ためいきをしつづける。

“The Fairy and the Doll”	<i>Eight Little Plays for Children.</i> 1924	SCENE. — <i>A Garden. The DOLL is lying flat on her face on the ground with arms and legs stretched out. [Enter SILVERWING.] S. Why, here's Patty's doll, left to spend the night in the garden.</i>
	鈴木三重吉 「おにんぎやう」 1926年6月号	場所。ジエーンのおうちのお庭。時間。夜 お人ぎやうは、地びたに顔をふせて、両手と両足を、こはばつたやうにつきひろげてたふれてゐる。妖女が出て来る。妖女。あら、ジエーンのお人ぎやうだわ。こんなところへほつといて、まあひどいジエーンだこと。
“The Pillar-Box”	<i>Forty Good-Night Tales.</i> 1923	A pillar-box once stood at the corner of a quiet square in a big town. It was round and red and respectable. It had to be. It often had charge of valuable and important letters.
	須川よし子(森三郎) 「赤いポスト」前半 1931年9月号	町の、ひつそりとした四つじの片すみに、丸い帽子をかぶつた、品のいゝ赤いポストが立つてゐました。ポストといふものは、人が待ちにまつてゐる手紙や、だいじな御用の手紙などをあづかるのですから、役目もおもい(ママ)もので、いつも、その場をはなれずに、じつとたつてゐなければならないものです。
“The Fairy Who Fell Into a Letter-Box”	<i>Forty Good-Night Tales.</i> 1923	There was once a fairy who got into a letter-box by mistake. She was rather inquisitive, and was trying to look inside, when some one posted a big letter, which pushed her down into the box.
	須川よし子(森三郎) 「赤いポスト」後半 1931年9月号	或とき、或ポストの中へ、一人の妖女がおちこみました。[原文にない妖女の説明] その妖女はとてもめづらしいものずきの妖女で、[原文にない状況] ポストの口のところにとまつて、そつと、のぞきこみました。すると、ちょうどそのとき、一人の人が、大きな手紙のふくろをなげこみました。妖女はそのはずみに、すんと一しよに中へつきおとされました。
“The Magic Umbrella”	<i>The Rainbow Cat and Other Stories.</i> 1922	There was once a wizard who possessed a magic umbrella; and, being rather careless in his habits, he had the misfortune to leave it behind him in a small country town where he had had an appointment to meet a friend in the market-place at midnight.
	森三郎 「かうもり傘」 1931年11月号	或、まほうつかひのおぢいさんが、とてもふしぎな、まほうの、かうもり傘をもつてゐました。[略] ところがそのおぢいさんは、ひどくそゝっかしいおぢいさんで、或日、そのかうもりを、ゐなかの町の市場へおきわすれました。
“Mrs. Moodle (i) the whirlwind”	<i>Forty Good-Night Tales.</i> 1923	There was once a dear old lady whose name was Mrs. Moodle. She had a pet poodle, and the poodle's name was Troodle. It does seem an odd thing that their names should rhyme, doesn't it?
	笹塚一二(森三郎) 「つむじ風」 1936年10月追悼号	ムドル奥さんといふ面白いおばあさんがありました。お気に入りの彪犬(むくいぬ)があつて、名前はワドルルといふのでした。名前の似てるのが、をかしいぢやありませんか。

三重吉は「人の作物を訳すというよりは、原作に磨きをかけてやるのだといふくらの意気込み」（森三郎, 1936）だったという。“The Fairy Riddle”（妖精のなぞ）を「銀の上着」、「The Fairy and the Doll」（妖精と人形）を「おにんぎやう」とし、「妖精」を削除し、前者では「しづんだ顔をして」を加え、また後者では Patty を「ジェーン」に変更している〔表3〕。

「赤いポスト」の違和感は、前半“The Pillar-Box”の主人公が郵便ポストで、後半が“The Fairy Who Fell Into a Letter-Box”で「或とき、或ポストの中へ」で始まることにある。高瀬嘉男訳『動物新童話集』春陽堂（1933）「四十日夜噺選集」（*Forty Good-Night Tales*）は前者を「退屈した郵便箱」、後者を「ポストへ落ちこんだ蝶」とし、原作通り独立した別の物語としている。

“The Magic Umbrella”原文では後段の3、5、7まで数えると生じる出来事も、「かうもり傘」では〔表3〕に示す第一段落〔略〕にある。「赤いポスト」「かうもり傘」に「銀の上着」「おにんぎやう」に近いものが感じられる。三重吉の訳出に、三郎の手が入ったかと思われる。

1931年11月、三重吉から初めて手紙が届き、翌1932年1月に再び手紙があり、三郎は三重吉を訪問、6月に赤い鳥社に入社する（酒井, 1995, p. 258）。「かうもり傘」掲載の1931年11月号は10月初めに届いていよう。赤い鳥社入社を促すため「かうもり傘」を提供したかと想像される。

「つむじ風」は「赤いポスト」「かうもり傘」の5年後である。『動物新童話集』を三郎が知っていたかは不明である。高瀬の“the whirlwind”「空へまひあがった蝙蝠傘」は、「かうもり傘」を連想させる。文頭の Moodle, poodle, Troodle を高瀬はアジサキ、むく犬、ハヤブサとし、「つむじ風」はムドル、彪犬（むくいぬ）、ワルドルとしている。三重吉遺稿に三郎が手を入れ、出典を明記し、掲載したと思われる。自身でないから森三郎名を使わず、「笹塚一二」としたのではないだろうか。「笹塚」は森を、「一二」は三重吉・三郎の「三」を連想する。「須川よし子」は「素顔良し子」からだろうか。須川・笹塚名義は「赤いポスト」「つむじ風」以外に使用例はない。

ローズ・ファイルマン『まほうのかさ』

わが国でファイルマンが知られるのは、福音館書店（こどものとも516号）『まほうのかさ』（1999）によってであろう。「R. ファイルマン原作、E. コルウェル再話、松岡享子・浅木尚実訳」とある。コルウェル再話の原典は、Eileen Colwell. *The Magic Umbrella and Other Stories Of Telling*, Hill & Wang Pub (1977) で、1977年はファイルマン生誕100年である。浅木（1999）は「『まほうのかさ』は、日本のストーリーテラーたちが、邦訳される日を長らく、待ち望んでいただけに（略）日本に上陸できたことをうれしく思って」と書いている。松岡・浅木訳は15年後「魔法のかさ」として東京子ども図書館『おはなしのろうそく30』（2014）に収録された。

“The Magic Umbrella”は松岡・浅木訳以前の小学館『小学四年生』1973年1月号に、白木茂訳「ま法のこうもりがさ」(原作ローズ・ファイルマン)が掲載されている。白木は『赤い鳥』「かうもり傘」を知らなかったであろう。翌1974年、白木茂訳・香山美子文で簡略化され「学研おはなしえほん」6巻3号『まほうつかいのかさ』として出版された。白木「1910年青森県生。外国児童文学の翻訳紹介に従事」、香山「1928年東京生。童話、少女小説」とある。同書裏表紙の出典『40good [sic] night tales』は *The Rainbow Cat and Other Stories* でなくてはならない。

“The Magic Umbrella”は『赤い鳥』「かうもり傘」(1931)、白木「ま法のこうもりがさ」(1973)、香山『まほうつかいのかさ』(1974)の3回、またコルウェル再話(1977)は松岡・浅木『まほうのかさ』(1999)「魔法のかさ」(2014)によって2回、都合5度紹介されたことになる。

再話の特徴は「教会の塔を回るところまで描かれていなかったので」「エピソードを付け加えた」(浅木, 1999)点にある。最終原文は“It wouldn't be very pleasant to find yourself suddenly hanging from the top of the nearest church steeple, now would it?”と仮定法過去の付加疑問である。『赤い鳥』は「あッといふ間に、もう、からだがお寺の塔のてんべんへ上つてゐたりして、下りるにも下りられず、あーんと泣き出しても、もうおよばないなんてことになりま^すよ^よ」(森三郎, 1931, p. 43)、白木(1973, p. 386)では「数を数えたりして、いきなり、近くの教会の、とんがったとうのてっぺんに連れて行かれたりでもしたら、こまっちゃいますものね」である。再話では、中盤過ぎに「『1・2・3・4・5・6・7ー』ヒュー! とたんに、おかみさんは、そらに まいあがり、パラシュートのように かさを さしたまま、きょうかいの とうの まわりを グルグルグルとびまわっていま^した^た」(松岡・浅木, 1999, pp. 23-25)となる。浅木(1999)は「教会の塔の場面」は「コルウェルさんと子どもたちの作り上げた」ものと説明している。

ローズ・ファイルマン作品の受容

わが国に紹介された他のファイルマン作品には菊池寛編『児童劇集』(1928)所収R・ファイルマン「天気の子」、佐藤一英編『児童文学』第1冊・文教書院(1931)ロオズ・ファイルマン著・近藤東訳「焼栗屋」、神宮輝夫編『銀色の時』講談社(1986)若林ひとみ訳「サンタクロースが風邪をひいたら」(“Mother Christmas” *Number Two Joy Street*, 1924. Basil Blackwell)、神宮輝夫編『夏至の魔法』講談社(1988)ももかずこ訳「王室御用達の焼きぐりは、いかが?」(“The Chestnut Man” *Number Five Joy Street*, 1927)、青木栄一訳『お気に入りの猫物語』(1995)「ペルシャ猫物語」(“A Persian Tale” *Forty Good-Morning Tales*, 1926. Methuen)がある。「天気の子」に出典はないが、*Eight Little Plays for Children* (1924) “The Weather Clerk”であることを確認した。菊池寛は1919-23年に『赤い鳥』に作品を寄せており、訳者名はないが三重吉の

可能性がある。「焼栗屋」出典は“The Chestnut Man”（前出）である。ファイルマン作品受容の歴史を〔表4〕に示す。

三郎の『赤い鳥』発表作品は「119編、使用した名義は本名を含め46」（酒井，1995，p. 243）だが、初年1931年11編のうち「赤穴宗右衛門兄弟」など4作品〔表1〕が小泉八雲の、「赤いポスト」「かうもり傘」〔表2〕がファイルマンの再話である。残り5作品の「人形しばる」（5月号、筆名茅原順三）、「ゐぐひ太郎」（9月号、筆名同）、「三條中納言」（11月号、筆名石井静）が柴田宵曲一森銑三、「夢買ひ」（10月号、筆名同）、「羅生門」（12月号、筆名村井章一）が、銑三の出典再話であろうことが、神谷（2017.12）によって指摘されている。

出典を示さないことは今日から考えれば適切ではない。しかし当時は三重吉を含め再話が多く、著作権に対する考えが異なることを理解する必要があるだろう。三郎が「つむじ風」文頭に「（ローズ・ファイルマン）」と明示したからこそ、ファイルマン—鈴木三重吉—森三郎の流れを明らかにすることができた。

2018年の『赤い鳥』創刊100年、ふるさと刈谷市では森三郎刈谷市民の会脚本・絵、刈谷市教育委員会発行により、森三郎童話紙芝居「こうもり傘」制作が計画されている。

表4 日本におけるローズ・ファイルマン童話・劇の受容の歴史

TABLE 4 Timeline Showing How Rose Fyleman's Works Have Been Accepted in Japan

作品	“The Magic Umbrella” in <i>The Rainbow Cat and Other Stories</i> . 1922. Methuen	“The Pillar-Box” “The Fairy Who Fell into a Letter-Box” “Mrs. Moodle (i) the whirlwind” in <i>Forty Good-Night Tales</i> . 1923（同「赤いポスト」「つむじ風」）	“The Fairy Riddle” “The Fairy and the Doll” in <i>Eight Little Plays for Children</i> . 1924. Methuen （同「銀の上着」「おにんぎやう」）
年	（『赤い鳥』「かうもり傘」）		
1926			3 『赤い鳥』鈴木三重吉「銀の上着」、6 『赤い鳥』同「おにんぎやう」
1928			[菊池寛編『児童劇集』（小学生全集第76）R・ファイルマン「天気の子」“The Weather Clerk” 1924]
1929	[1929.4-1930.12 『赤い鳥』休刊、このころ鈴木三重吉、復刊『赤い鳥』のためファイルマン「かうもり傘」「赤いポスト」「つむじ風」和訳か]		鈴木三重吉『十二の星』「銀の上着」春陽堂、同『世界童話集』第5集「夜」[「おにんぎやう」]「銀の上着」同

1931	11 『赤い鳥』 森三郎「かうもり傘」	9 『赤い鳥』 須川よし子 (森三郎)「赤いポスト」(ファイルマンによる)	[佐藤一英編『児童文学』第1冊 近藤東訳「焼栗屋(ロオズ・ファイルマン著)」(“The Chestnut Man” (1927). In <i>Number Five Joy Street</i> . Oxford: Basil Blackwell) 文教書院]
1933		高瀬嘉男訳『動物新童話集』 「ポストへ落ちこんだ蝶」 「退屈した郵便箱」「空へまひあがった蝙蝠傘」	
1936		10 『赤い鳥』 追悼号 笹塚一二(森三郎)「つむじ風」(ローズ・ファイルマン)	
1949			鈴木三重吉『黒い騎士 三重吉童話代表作集』「銀の上着」小峰書店
1960			桑原三郎『鈴木三重吉の童話』:「銀の上着」「おにんぎやう」立項
1973	1 小学館『小学四年生』 R. ファイルマン原作、白木茂訳「ま法のこうもりがさ」		
1974	6 「学研おはなしえほん」 6巻3号 R. ファイルマン原作、白木茂訳・香山美子文『まほうつかいのかさ』		
1977	<i>The Magic Umbrella and Other Stories Of Telling</i> , Eileen Colwell, Hill & Wang Pub		富田博之編著『赤い鳥童話劇集』鈴木三重吉「銀の上着」東京書籍
1986			[若林ひとみ訳「サンタクロースが風邪をひいたら」(“Mother Christmas” (1924). In G. K. Chesterton et al., <i>Number two Joy Street</i> . Oxford: Basil Blackwell) 神宮輝夫編『銀色の時』講談社文庫]
1988			[ももかずこ訳「王室御用達の焼きぐりは、いかが?」(“The Chestnut Man” (1927). In <i>Number Five Joy Street</i> . Oxford: Basil Blackwell) 神宮輝夫編『夏至の魔法』講談社文庫]
1995			[ローズ・ファイルマン「ペルシャ猫物語」(“A Persian Tale” (1926). In Rose Fyleman, <i>Forty Good-Morning Tales</i>) 青木栄一訳『お気に入りの猫物語』DHC (Robin Upward, Cleveland Amory. <i>Cat Tales</i> , 1989, Penguin)]
1996	刈谷市教育委員会『森三郎童話選集 夜長物語』「かうもり傘」 pp. 62-69	刈谷市教育委員会『森三郎童話選集 夜長物語』「赤いポスト」 pp. 7-14	

1999	3 R. ファイルマン原作、 E. コルウェル再話、松岡 享子・浅木尚実訳『まほう のかさ』福音館書店	
2014	11 東京子ども図書館『お はなしのろうそく30』松 岡享子・浅木尚実訳「魔法 のかさ」	神谷磨利子「森三郎とロー ズ・ファイルマン」：「赤い ポスト」「かうもり傘」「つ むじ風」原典発見
2018	刈谷市教育委員会 森三郎 童話紙芝居「こうもり傘」 発行予定	

引用文献

- Carpenter, Humphrey and Prichard, Mari (1999). *Oxford Companion to Children's Literature*. Oxford: Oxford University Press.
- Fyleman, Rose (1922). "The Magic Umbrella." In *The Rainbow Cat and Other Stories* (pp. 103-109). London: Methuen & Co. Retrieved from http://fadedpage.com/showbook.php?pid=20081209#THE_MAGIC_UMBRELLA
- Fyleman, Rose (2015). *The Rainbow Cat and Other Stories*. Classic Reprint Series. London: Forgotten Books
- Fyleman, Rose (1923). "XXVI The Pillar-Box" "XXXIX The Fairy Who Fell Into a Letter-Box" and "IX Mrs. Moodle (i) the whirlwind." In *Forty Good-Night Tales*. Retrieved from <http://fadedpage.com/showbook.php?pid=20090208> (London: Methuen & Co.)
- Fyleman, Rose (1925). "The Fairy Riddle" and "The Fairy and the Doll." In *Eight Little Plays for Children* (pp. 22-32, 50-54). Garden City, New York: Doubleday & Company, Inc. (Methuen & Co. 1924)
- 浅木尚実 (1999) 「聞き手が生んだお話」「絵本のたのしみ」(こどものとも516号『まほうのかさ』折り込みふろく) p. 1、松岡享子・浅木尚実訳、R. ファイルマン原作、E. コルウェル再話『まほうのかさ』福音館書店
- 勝尾金弥 (1996) 「解説」勝尾金弥編『鈴木三重吉童話集』岩波文庫、pp. 249-264
- 神谷磨利子 Kamiya, M. (2014) 「森三郎とローズ・ファイルマン」、「森三郎の作品を読む会」会誌『かささぎ』創刊号、森三郎刈谷市民の会、pp. 40-37 (逆頁)
- 神谷磨利子 (2017.3) 「森銑三・森三郎兄弟と刈谷」『かりや』第38号、刈谷市郷土文化研究会、pp. 65-78
- 神谷磨利子 (2017.12) 「森三郎童話の原典・話材を探る」、「森三郎の作品を読む会」会誌『かささぎ』第3号、pp. 4-14
- 桑原三郎 (1960) 『鈴木三重吉の童話』桑原三郎
- 酒井晶代 Sakai, M. (1995) 「森三郎・人と作品」刈谷市教育委員会編『森三郎童話選集 かささぎ物語』、pp. 232-261
- 白木茂 (1973) (原作ローズ・ファイルマン) 「魔法のこうもりがさ」『小学四年生』1973年1月号、小学館、pp. 375-387
- 鈴木三重吉 (1918) 読者からの問い合わせへの回答「通信」欄 (pp. 76-79) 『赤い鳥』1918年9月号、赤い鳥社、p. 79

鈴木三重吉（1938）『鈴木三重吉全集』第6巻、岩波書店

西村醇子（1999）「ファイルマン、ローズ」神宮輝夫監訳『オックスフォード世界児童文学百科』原書房、p. 671

萩原敬一（1969）「萩原恭平氏略歴」『英語青年』1969年10月号、p. 636（通算）

萩原恭平・刈谷新三郎 譯註（1926）『小泉八雲選集』Selections From Lafcadio Hearn, Vol. 1 第一篇、嶺光社・開隆堂

萩原恭平・刈谷新三郎 譯註（1927）[英文ページ表記は1926]『小泉八雲選集』第二篇、嶺光社・開隆堂

半田淳子（1998）『永遠の童話作家 鈴木三重吉』高文堂出版社

広島市立図書館「鈴木三重吉と『赤い鳥』の世界」<https://www.library.city.hiroshima.jp/akaitori/>

松岡享子・浅木尚実訳（1999）R. ファイルマン原作、E. コルウェル再話『まほうのかさ』福音館書店

森三郎「かうもり傘」（1931）『赤い鳥』1931年11月号、赤い鳥社、pp. 38-43

森三郎（1936）「珊瑚ちゃんへの至願」『赤い鳥』1936年10月・鈴木三重吉追悼号、赤い鳥社、pp. 126-129

森銃三（1974）「萩原恭平君逝く」「学生時代の萩原恭平君」『森銃三著作集』第12巻（雑纂）中央公論社、pp. 505-508, 516